

【書評】

## 山本英司著 『カレツキの政治経済学』

鍋 島 直 樹

### 1. 本書の目的と特色

本書は、ポーランド生まれの経済学者ミハウ・カレツキ (Michał Kalecki, 1899~1970年) の学問的貢献を考察の対象とし、その全体像を明らかにしようとする研究書である。言うまでもなくカレツキの経済学は、ポスト・ケインズ派をはじめ、今日の異端派経済学における諸潮流の主要な理論的源泉の一つとして知られている。それゆえ、カレツキの理論と思想に学説史的な観点から検討を加えようとする研究や、経済学の進歩に照らしてその理論的枠組みのいっそうの拡張をはかろうと試みる研究は、彼の没後も絶え間なく発表されつづけてきた。経済学史の領域においても、カレツキの経済学に関する著書や論文はすでに内外を通じて相当な数にのぼり、その研究の蓄積は決して薄くない。

これらの研究文献の目録に、本書が新たに追加された。本書の意義として第一に挙げられるのは、これがカレツキの経済学について網羅的・包括的な検討を加えた国内で初めての著作だということである。これまでも、ポスト・ケインズ派経済学に関する著作は数多く刊行され、またそれらの書物は、カレツキの経済学上の貢献について多くの紙幅を割いて論じている。しかしながら、全ページを挙げてカレツキの経済学について論じた書物は、今日にいたるまで国内には存在していなかった。さらに、これまで内外で刊行されたカレツキ研究の著作の大多数は、彼の資本主義経済分析を中心に扱うものであり、本書のように、資本主義経済・社会主義経済・発展途上経済の各々に関するカレツキの分析に総体的な検討を加えた書物はきわめて少ない。この点でも、本書の貢献は価値あるものであると言えよう。さらに本書は、第1章に「カレツキ入門」を配するなど、多くの読者にとって近づきやすいものとなるような配慮がなされているので、カレツキ研究者のみならず、カレツキ経済学の全体像について大まかな知識を得たいと考える専門外の読者にとっても有益な書物となっている。

### 2. 本書の概要

まず第1章では、カレツキの生涯と業績、およびカレツキ自身の著作とカレツキに関する研究文献について紹介し、読者をカレツキの経済学へといざなう。第2章と第3章は、カレツキの資本主義経済分析を扱う。第2章ではポーランド語で1933年に出版された小冊子『景気循環

理論』にさまざまな角度からの検討を加えることを通じて、カレツキがケインズに先立って「有効需要の原理」に到達していたことをあらためて確認するとともに、同書には、その後のカレツキの理論的枠組みにおける基本的構成要素、ないしはその萌芽のほぼ全てが含まれていると論じている。第3章では、上述の『景気循環理論』に始まるカレツキの理論体系の変遷について、彼の五つの主要な著書の体系を年代順にたどることによって考察する。その結果、カレツキの理論体系の骨格は1930年代にほぼ完成していたと著者はふたたび主張する。しかしながらこの点については、カレツキ自身が『資本主義経済の動態理論』(1971年)の「序文」において、「投資決意の理論に関しては、新しい解決を求めて絶えず模索が行なわれた」と述べており、すべての体系に共通する側面と、しだいに変化を遂げていった側面とにあわせて注目したうえで判断する必要があるだろう。

第4章と第5章では、カレツキの開発経済論について検討する。第4章は、開発経済学者としてのカレツキの活動を振り返ったのちに、彼の開発経済学の概要を紹介している。途上国経済は資本設備や食糧供給の不足によって特徴づけられ、これらのボトルネックが経済発展に対する重大な制約となっているというのが、カレツキの基本的な見解であった。さらに彼は、開発経済学の理論的考察を行なうにとどまらず、イスラエル・インド・キューバの三国において経済計画の作成に携わるなど、経済開発の実践活動にも積極的に取り組んだ。第5章では、これら三国の政策形成にカレツキがかかわるに至った経緯、彼の政策提言、およびそれに対する各国政府の反応が紹介されており興味ぶかい。いずれの国においても、慎重で控えめな経済成長の見通しにもとづくカレツキの提案が本格的に取り入れられることはなかった。

ここまでの議論を踏まえて、第6章は、資本主義経済・社会主義経済・低開発経済のそれぞれに関するカレツキの研究を手がかりに、彼の比較経済体制論を再構成しようと試みる。カレツキの見るところ、資本主義経済における失業は、有効需要の不足によって発生する。これに対して社会主義経済と低開発経済においては、供給側の制約のために失業が発生する。そして社会主義経済では中央計画にもとづく適切な経済運営が可能であるのに対して、低開発経済ではそうでないという違いがある。社会主義経済についてのこのような特徴づけはカレツキの願望にもとづくものに過ぎず、そうした見方はのちの歴史によって否定されたのだと著者は指摘する。しかしそれと同時に、資本主義および社会主義の将来について常に冷静な眼で分析しようとしていたカレツキの姿勢がありありと描き出されている。

第7章と第8章は、本書の締めくくりとして、カレツキの経済学の思想的基礎について考察する。第7章では、カレツキをマルクス経済学者ないしはマルクス主義者と見なすことができるのか否かという問題に関する多くの論者の議論を紹介したのち、カレツキが社会主義の運動や実践とどのようにかかわったのかに焦点を当てながら、彼の生涯を振り返る。これを通じて、カレツキがマルクスから大きな影響を受けながらも、その理論と思想を独創的なたちで発展させていこうと努めていたことが示されている。第8章は、資本主義体制の歴史的命運に関す

るカレツキの見解の変遷をたどることによって、彼の思想的特質を明らかにしようとする。そして前章と同様に、社会主義に希望を託しながらも、その時々 of 政治的・経済的状況を冷徹に見極めたうえで、大衆の生活水準の向上をはかるべく、その時点において最も望ましい社会改革の方向を慎重に探っていくとしたカレツキの姿を克明に伝えている。そして、カレツキの資本主義観の進化においては、唯物史観が「導きの糸」としての役割を果たしていたのだと論じている。

### 3. 残された課題

ここまで見てきたように、本書は、カレツキの経済学に関する総合的な研究書である。資本主義経済・社会主義経済・発展途上経済という20世紀世界における三つの経済システムに関するカレツキの研究に総体的な検討を加えているのみならず、その思想的な背景にまで分け入ってカレツキの原像に迫ろうとする。カレツキの原典はもとより、数多くの第二次文献の精密な読解によって、この試みはおおむね成功を収めていると言ってよい。以下では、いっそうの研究の進展への期待を込めて、著者がこれから取り組んでいくべき課題について私見を述べることにしたい。

多くの論者が指摘するように、カレツキの文体はきわめて簡潔・明瞭であり、素っ気ないほどに理路整然と議論が進められている。それゆえ、カレツキが何を言ったのか言わなかったのか、あるいは彼が何を言おうとしたのかなどという論争はほとんど存在していない。したがって、カレツキ研究において自らの独自性を打ち出していくようにするには、カレツキの経済学にどのような歴史的な位置づけをあたえるのか、そしてその発展の可能性をどこに求めるのが重要な論点となる。しかしながら、これらの点において、本書のメッセージはやや鮮明さを欠いているのではないかという印象を受けた。

まず、経済学の歴史においてカレツキの経済学にいかなる位置づけが与えられるのかという問題から見ていこう。マルクス主義とカレツキとの関係について論じた二つの章が本書の最後に置かれていることから理解されるように、著者の関心の一つは、マルクスとカレツキの理論を比較検討することにある。しかしながら、カレツキの経済学をマルクス経済学の一発展であると位置づけ、その延長線上で新たな展開をはかろうとしているのかどうかは定かでない。もしマルクス経済学の歴史的展開のなかでカレツキの貢献の意義を明らかにしようとするのであれば、マルクス、ローザ・ルクセンブルク、ミハイル・ツガン - バラノフスキーらの経済理論から彼が何を学んだのかについて論じなくてはならないし、またバランとスウィージーをはじめとする同時代および後のマルクス経済学者たちに対して彼が及ぼした影響についても検討しなくてはならないはずである。あるいは、ケインズ経済学の流れのなかでカレツキの研究を扱おうとするのであれば、ケインズ自身の貢献とともに、ケインズとカレツキに知的刺激を受

けた多くのポスト・ケインズ派経済学者たちの貢献を取り上げなくてはならないであろう。ともあれ、カレツキの経済学がどのようにして成立に至り、またそれがどのように発展していったのかを明確に示すことが望まれる。

この問題と密接にかかわって、現代経済学の展開においてカレツキの知的遺産をどのようなかたちで活かしていくのかについても、大まかな展望を示すことが求められる。というのも、カレツキの経済学は決して過去の遺物ではなく、今なお進化の過程にあるからである。すなわち今日においてもカレツキの理論は、ポスト・ケインズ派、フランス・レギュラシオン派、アメリカ・ラディカル派、構造主義マクロ経済学など、非新古典派の政治経済学の流れに属する多くの研究集団によって様々な方向への拡張が進められている。しかしながら本書では、これらの試みにほとんど触れていないので、著者がどのようなアプローチに共鳴し、またカレツキの経済学をどう発展させていこうと考えているのかが必ずしも明瞭に伝わってこない。政治経済学の再生と発展に向けてカレツキの遺産を活用しようとするのであれば、マルクス経済学やケインズ経済学の現代的展開に照らしつつ、カレツキの今日的意義を明らかにしていくための作業が必要となるだろう。

さらに、おそらく著者も同意見であろうと思うが、カレツキの著作を読むことは、過去の理論や思想について知ることができるというだけでなく、現代の経済社会を理解するための多くの手がかりを得ることができるという点においても有益である。価格決定・所得分配・景気循環などの問題を分析するための彼の理論的枠組みは、今日においても、主流派経済学とは異なる視点から資本主義経済の構造と動態を解明していこうとする人々にとっての重要な参照軸となっている。そして、先進各国において所得格差拡大や貧困の問題が深刻の度を増しているなかで、所得分配と経済成長との関係に焦点を合わせたカレツキの理論に立ち返ることの意義はますます大きくなっている。したがって、現代経済が直面している諸問題の解決をはかるうえで、カレツキの経済学をどのように活かすことができるのかを探っていくことも不可欠の課題となる。

また他方で、カレツキが世を去ってから既に40年の歳月が流れ、その間に資本主義経済は、生産活動のグローバル化、金融市場の規模と役割の拡大、労使関係の変容など、大きな変化を経験した。したがって、こうした資本主義の構造変化を考慮に入れて、カレツキの分析枠組みをよりいっそう洗練していくことが必要となっている。著者の今後の研究において、現代の経済と経済学の動向を踏まえつつカレツキ経済学の再検証が進められるとともに、それを通じてその新たな発展の方向が明らかにされていくことを望みたい。